
全労済協会
「つながり暮らし研究会」
概要

第7回（2018年7月23日 開催）

1. 委員発表

(横浜市立大学大学院(国際総合科学群)准教授 三輪 律江 氏)

(1)三輪委員の研究テーマ

これまで私は「子ども」と「まち」との関係に着目して、参画型まちづくりとまちづくり教育、「居場所」としての都市空間の在り方、コミュニティ活性化に向けた施設空間整備、商店街を中心とした子どもの地域への「なじみ」形成、魅力的な地域資源となるための公園の配置整備などの調査研究を手掛けてきました。その中から今回は私の最新著書『まち保育のススメ』(萌文社、2017.5)で提唱している「まち保育」という概念についてご紹介します。

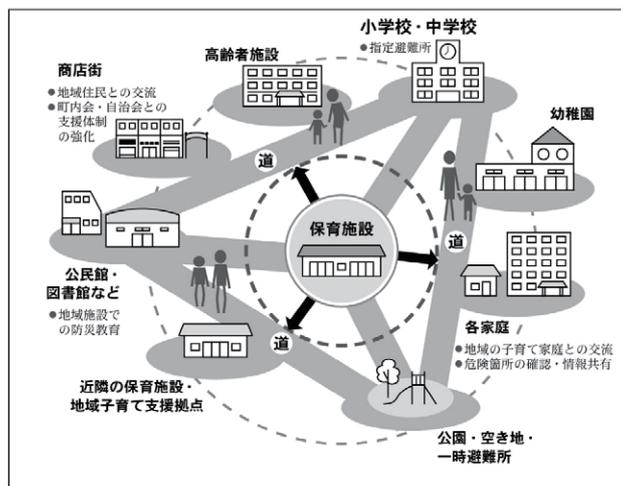
(2)子どもとまちの関係ー現状と「まち保育」

現代の就学前の子ども達が集まる“場”は多様化・複雑化しており、子育ての当事者である保護者、教員、保育士以外の人からは、状況が見えづらくなっています。そのような状況では、子育て家庭に対する支援は一般的なものでは不十分であり、子育ての孤立化＝「孤育て」が問題となっています。

そこで、子育てを当事者だけに限定しない視野や、保護者・乳幼児の立場に立って地域で支えあうまちづくりが必要であると考え、「まち保育」という概念を提唱しました。そしてこれまでの調査研究から、乳幼児期の子どもが生活に密着した地域社会の中で育まれる乳幼児生活圏の圏域(乳幼児生活圏)としては、小学校区より一回り小さい300m前後の本当に小さな範囲であると推察されます。

「まち保育」とは、「子どもたちの生活をより豊かにするもの。まちの資源を保育に活用し、まちでの出会いをつないで関係性を広げていくこと、そして、子どもを囲い込まず、身近な地域社会と一緒にあって、まちで子どもが育っていく土壌づくりをすること」としています。

〈図1〉保育施設を核とした乳幼児生活圏モデル



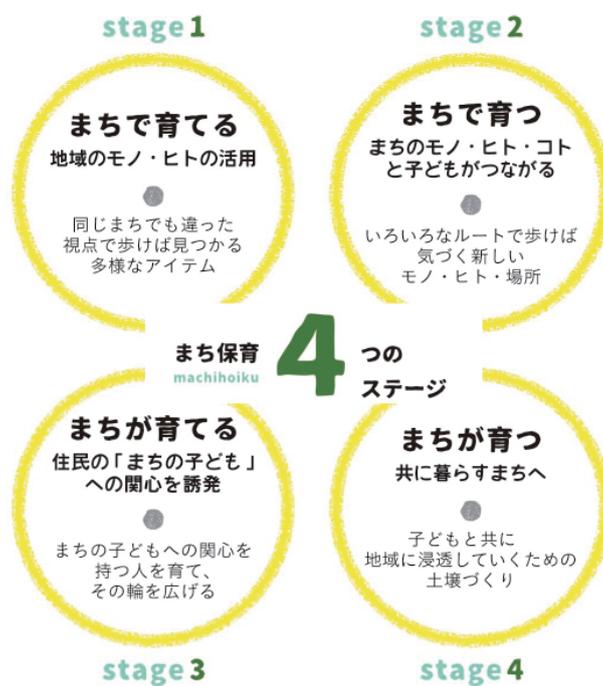
(「まち保育のススメ」萌文社より)

(3)「まち保育」を実現するための4つのステージ

まち保育の1つとして、主に都心部の保育施設が園外活動として行う「お散歩」に着目して、保育施設と乳幼児期の生活圏の地域をつなげるしかけとして、「マップづくりワークショップ」を実施しました。ワークショップでは、子どもがお散歩の中でお気に入りのものを写真にとってまとめたり、お散歩コースを自分たちで考えたり、いつも声を掛けてくれる地域の人にありがとうカードを配ったりしました。そうして先ほどの乳幼児生活圏となる小さい範囲のまちを違ったテーマで繰り返し歩くことで、保育施設とまちとのつながりも広がり、深まっていきました。こうしたワークショップから、<図2>のように、「まち保育」の実現のためには、「まちで育てる(地域のモノ・ヒトの活用)」「まちで育つ(まちのモノ・ヒト・コトと子どもがつながる)」「まちが育てる(住民の『まちの子ども』への関心を誘発)」「まちが育つ(共に暮らすまちへ)」という4つのステージがあることがわかりました。

子育て支援の場や、家庭生活、地域の活動においても、「子どもがまちで育つ」視点を大切にして、「まち保育」の4つのステージが実現されるために必要な戦略を立て、引き続きさまざまな活動を行っていききたいと思います。

<図2>まち保育4つのステージ



(「まち保育のススメ」萌文社より)

<文責:全労済協会調査研究部>